

## 平成30年度 合同会派による研修報告書

参加者 ①新田 勝見 ②安部 重幸 ③多田 誠一 ④菊池 充  
⑤多田 勉 ⑥菊池由紀夫 ⑦萩野 幸弘 ⑧瀧澤 征幸 以上8名

平成30年08月10日（金）

報告者：瀧澤 征幸

<p>テーマ 日時 研修先 対応者</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雇用創出とIターンの促進等移住者支援の取組について</li> <li>・バイオマス発電施設について（現地）</li> <li>・平成30年8月8日（水）午後2時から</li> <li>・群馬県上野村</li> <li>・村議会議長 仲澤太郎 上野村振興課長 黒澤旨志 議会事務局長兼総務課係長 高瀬淳一</li> </ul>
<p>視察内容</p>	<p>上野村は、群馬県で最も小さい自治体である。現在1,200人未満の人口となったが、日本の地図からなくさないよう、また、仕事をいかに確保するかを命題として行政展開されている。過疎からの脱却のためには若い力の結集が必要と考え、平成元年度から、若い世代を主に対象とした定住対策に全力を注いできた。そのためには、村内で安心して働くことができる雇用の場の創出、比較的安価で優先的に居住できる村営住宅整備（現地で見学してきた）、生活支援策などを強力に推進し、その結果、定住者（Iターン者）は260人となり、村の総人口の約20%に達した。そのほか、子育て対策、高齢者福祉の増進、村内95%を占める森林有効活用、バイオマス有効活用による村内循環型社会の構築への取組に挑戦してきた。自立する村の代表モデルとなるよう頑張ってきたという。</p> <p>まず、定住対策重点1は、雇用の場の創出であるが、驚くべきことは、村が主体の雇用の場の創出であるということ。村直営による合同会社運営により、道路や公共施設の維持管理、景観整備、畑作の振興など、村の郷土保全の事業を進めている。</p> <p>重点2は、村営住宅の整備であり、実際にその住宅をみせていただいたが、とても素晴らしい住宅であった。面白いのは、その住宅を村内1カ所に作るのではなく、各集落の実情を勘案しながら分散して配置させている。これまで143世帯分整備をおこなったが、依然供給不足という。</p> <p>重点3は、生活補給金の支給、結婚祝い金支給、生活資金借り入れ金利子の助成、住宅取得応援資金の助成、奨学金の貸与でいずれも振興課が担当している。</p> <p>以外の独自政策として、①イノブタ事業②うへのテレビ（てれびとインターネット）③かじかの里学園の運営④健診費の無料化⑤上野村産業情報センターの運営⑥バイオマスツアー</p> <p>その他には循環型社会の形成（バイオマス利用）、環境保全（浄</p>

	<p>化槽普及率96%)、地場産業(きのこセンター、貸し工房加工センター運営、木工業振興、林業振興)など。</p> <p>また、子育て支援として、誕生祝金、養育手当、特別養育手当、定額保育料、学校給食費の免除、学童保育所の開設・運営、子ども福祉医療の充実、入学祝金など。いずれも支援の額や負担額は、当市では考えられない数字である。</p> <p>以上の施策の詳細は紙面の関係から省略するが、いわゆるお手盛り行政運営が可能な最もお金持ちの村なのである。2014年で見ると、群馬県内の財政力指数トップがこの上野村で、1.01である。その背景には東京電力のダム設置があり、約14億円の資産税が入るからとのこと。上野ダム(神流川水力発電所)は、2005年12月より1号機が、2012年6月より2号機が運転開始。3号機から6号機までは2020年以降に運転開始予定らしい(インターネットにて調査)。</p> <p>バイオマス発電施設について、現地で説明を受けたが、これは木質ペレットをガス化して発電するもので、木材活用の手段を確保し、森林整備の推進や雇用創出に大きな効果が生まれる。ドイツ製の設備で、180キロワットの電気を発生、同時に200キロワットの温水が発生するので、これを近くのきのこセンターに供給している。</p>
感想・意見	<p>I・Uターンの可能性を探るべく研修に臨んだが、調べれば調べるほど、普通の自治体とは訳が違ってくる。しかも、上野村のHPを覗くと、統計データや財政状況資料はみんな古く、研修座学においてもそれらの資料が出されなかったから、いったいこれは何なんだろうと考えてしまった。</p> <p>当市と比較・参照する部分はあまりなかったように思うが、ただ、故郷を守ろうとする熱意だけは共感を得ることができたように思う。</p>

上野村議長室にて



<p>テーマ 日 時 研修先 対応者</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 森産業の乾しいたけの現状と今後の見通しについて</li> <li>・ 平成30年 8 月 9 日（木）午前10時から</li> <li>・ 群馬県桐生市</li> <li>・ 森産業(株)代表取締役社長 森 裕美（男性） 同社取締役 木村健彦 同社研究開発部課長 田村孝史（説明者）</li> </ul>
<p>視 察 内 容</p>	<p>森喜作は大分県出身で、貧困にあえぐ農家を救おうとシイタケが確実にできる方法を確認した人物である。また、この会社は、昭和18年4月に設立、きのこ種菌、菌床及びきのこ加工食品・飲料の製造販売、きのこ栽培施設の設計・施行・資材販売などを行い、全国的に有名である。</p> <p>今回の視察には、社長はじめ関係者の皆様が大変お忙しいところわたし達に対応していただいた。社長自らご挨拶いただき、感激したところでもある。</p> <p>今回のテーマである乾しいたけの生産状況であるが、ここ数年減少傾向で推移しているが、価格は平成20年から25年にかけて約5割下落し、その後大幅に上昇、平成28年は最高値を更新している。因みに、乾しいたけ生産では、岩手は全国6位と上位を占めている。しかし、原木の供給では不足状況が続いているという。</p> <p>問題は、ここ数年の天候不順である。1980年代の全国の平均気温は17.9度で、1990年代に気温が上昇し、2000年代では19.6度となっている。盛岡市の気温も調査されており、同じような傾向で13.6℃から15℃まで上昇している。秋の気温低下時期が遅く、春の気温上昇が早いために発生適温の期間が短くなっている。このことが、集中発生や不作の大きな要因であると説明された。それを克服するための品種改良と施設改良等の説明を受けた。</p> <p>そのあと、施設見学と実際の種駒等出荷直前のものや管理・保管状況などを視察することができた。</p>
<p>感想・意見</p>	<p>全国規模で事業展開している森産業、そのすそ野は広く、購入者も全国に広がっている。遠野市においても同様に、しいたけ生産のむずかしさやコツ含めて、せっかく購入した種駒なり菌床からいかに効率よく産出するかがポイントである。座学にてスライドを使ってしいたけ生産のノウハウの説明を受けたが、研修することの重要性を認識することができた。</p> <p>工場内見学においては、社員の皆様の礼儀正しさには驚かされ、もちろん品質管理の厳格さにも同様であった。</p> <p>3. 11以来、しいたけ出荷が制限されている生産者が何とかこの状況を打破し、1日でも早く当たり前にしいたけ生産できるよう願わざるを得ない。</p>

森産業会議室にて



中央の方が森社長



森産業桐生工場入口にある  
森喜作の像



上野村

バイオマス発電施設内部のどでかいエンジン（ドイツ製）

